

附 録

年 表

- 明治八年
- 四月一日 聯隊創設(第二大隊編成)
 - 九月九日 軍旗授與
 - 同 九年
 - 四月一日 第三大隊編成(福岡分屯)
 - 十月廿九日 秋月の役に一中隊出動
 - 同 十年
 - 二月十四日 鹿兒島地方暴動鎮壓のため熊本へ急行
 - 同 十九日 第一大隊左半大隊熊本城に入る
 - 同 廿二日 植木の激戦、旗手殿死軍旗行方不明となす
 - 九月廿四日 傷全く平定
 - 十月廿三日 小倉に凱旋
 - 同 十一年
 - 一月廿一日 戦功により再び軍旗を授與せらる
-
- 同 十五年
- 三月九日 福岡分屯の第三大隊小倉に合守
 - 同 十五年
 - 八月七日 第二大隊公使を護衛して朝鮮に向ふ
 - 九月廿四日 第四中隊を殘置して第二大隊歸營
 - 十月廿五日 第二大隊第四中隊京城より歸營
 - 同 十七年
 - 十二月廿七日 聯隊(第二大隊)全權大使を護衛して朝鮮に向ふ
 - 同 十八年
 - 一月十六日 談判終了、聯隊本部及び第三大隊歸營
 - 五月五日 歩兵第十二旅團編成
 - 六月廿二日 第一中隊を殘置し第一大隊朝鮮より歸營
 - 七月十九日 第一大隊第一中隊朝鮮より歸營
 - 同 十九年

0723

五月廿六日 威仁親王殿下御來營

同二十年

五月 熊本鎮臺廢止、第六師團司令部設置

十二月廿五日 威仁親王殿下より廿七日まで特命檢閲(威仁親王殿下)

同二十五年

三月三日 特命檢閲(三好中將)

同二十七年

七月廿五日 動員下令

九月廿四日 混成第十二旅團に屬して出發

同廿七日 仁川上陸、京城附近に在つて待命

十月三十日 仁川出帆、遼東半島に轉進

十一月三日 より六日までに花園口上陸、前進

同廿一日 旅順要塞攻撃

同二十八年

五月十三日 平和克復、勅諭を賜ふ

六月一日 小倉に凱旋を終る

同三十一年

十一月十七日 より十九日まで特別大演習

一一〇

同廿一日 第十二師團に編入

同三十二年

十月十九日 中原村附近にて皇太子殿下齋營演習參加

同三十五年

十一月十日 より十三日まで特別大演習

同三十七年

二月四日 第二大隊朝鮮派遣

同五日 動員下令

同十三日 屯營出發征途に上る、十八十九日仁川上陸

五月一日 九連城附近に戦闘

六月八日 賽馬集を攻撃

同廿二日 發陽邊門に敵襲撃退

七月十八日 橋頭附近に戦闘

同三十日 楡樹林子の戦闘、扁峯奪取

八月廿六日 より九月五日まで遼陽會戰參加

同三十八年

十月九日 より同十六日まで沙河會戰參加

0724

二月廿五日 より三月十六日まで奉天會戰參加
 十二月 屯營に凱旋
 同三十九年
 四月三十日 凱旋大觀兵式、軍旗及び代表隊參列
 九月廿九日 特命檢閲
 同四十年
 七月廿五日 韓國陸時派遺のため出發
 同四十二年
 六月十三日 韓國より歸營
 八月八日 より九日まで特命檢閲(川村大將)
 同四十四年
 六月八日 より九日まで特命檢閲(貞愛親王妃下)
 十一月十一日 より十四日まで特別大演習
 同四十五年(大正元年)
 七月三十日 明治天皇陛下崩御
 九月十三日 御大葬に軍旗及び代表者參列
 大正四年
 十一月十日 即位禮御舉行、進拜式を執行す
 十二月二日 大禮觀兵式、軍旗及び代表者參列

同五年
 十一月十一日 より十四日まで特別大演習
 同七年
 五月八・九日 特命檢閲(中村大將)
 八月二日 勳員下令
 同八日 より十日までに屯營出發、十三日まで
 に浦鹽上陸
 八月廿三日 より廿五迄クラエフスキートの戰闘參加
 九月八日 八府に入り爾後同地方の守備討伐に服
 同八年
 二月十七日 蝦支隊アンドレソカに激戰
 同廿六日 高橋支隊ユフタ附近に戰闘
 三月三日 パーロンカの戰闘參加
 七月八日 聯隊本部及び第一大隊屯營に凱旋
 同十二年 第二・第三大隊屯營に凱旋
 同九年
 十一月七日 より十日まで特別大演習
 同十年

0725

二月十八日 特命檢閲(木塚大將)

同 十一年

五月十日 秋山教育總監來營

同 十二月 山梨陸軍大臣來營

八月十五日 軍縮整理の爲第四・第八・第十二中隊
廢止

同 十二年

同 十三年

四月一日 創立第五十週年紀念祝典舉行

同 十四年

五月一日 陸軍軍制改革に依り歩兵第十二旅團に
編入さる

十二月十六日 より翌年一月十四日まで整備の爲一部
滿洲に派遣(郭松濤の恩)

同 十五年

十一月十五日 より同十八日迄特別大演習

十二月廿五日 大正天皇陛下崩御

昭 和 二年

二月七日 御大葬に軍旗及代表者參列

六月十八日 特命檢閲(森岡大將)

同 三年

十一月十九日 北方歩四七聯隊跡に轉營

十二月二日 大禮觀兵式、軍旗及代表者參列

同 四年

十月二十一日 より二十六日まで陸海軍連合演習

同 六年

十一月十二日 より十五日迄特別大演習

同 七年

二月二日 第二大隊に動員下令

同 月五日 屯營出發往途に上る七日吳淞上陸

同 月十三日 紀家橋附近に戦闘

三月一日 廟巷附近に戦闘

同 月二十三日 凱 旋

四月二十四日 勅諭下賜五十週年祝典

聯隊社鎮座祭

同 十年

十一月九日 より十三日迄特別大演習

一一二

0726

二、歴代聯隊長略歴

第一代 少佐 山田 頼太郎 明治八年四月一日就職
 第二代 少佐 乃木 希典 明治八年十二月十八日就職
 第三代 少中佐 奥 保翠 明治十年五月 日就職
 第四代 大佐 茨木 惟昭 明治十二年四月 日就職
 第五代 大佐 保科 正之 明治十六年二月 日就職
 第六代 中佐 友田 義喬 明治十六年七月十二日就職
 第七代 中佐 川崎 宗則 明治十九年五月二十七日就職
 第八代 中佐 三卷 弘毅 明治二十一年三月九日就職
 第九代 中佐 大佐 益 滿邦介 明治二十九年四月十一日就職
 第十代 中佐 大佐 栗原 常世 明治二十九年六月廿五日就職
 第十一代 中佐 大佐 今村 信敏 明治三十年十二月九日就職
 第十二代 中佐 大佐 竹下 平作 明治三十七年五月四日就職
 第十三代 大佐 菊地 主殿 明治四十年三月 日就職
 第十四代 大佐 宇宿 行朝 明治四十二年五月廿日就職
 第十五代 大佐 東郷 辰次郎 明治四十三年五月廿日就職
 第十六代 大佐 森 邦武 大正二年四月十六日就職
 第十七代 大佐 高崎 喜惣 大正三年五月十一日就職
 第十八代 大佐 井澤 岩平 大正五年一月十二日就職

第十九代 大佐 高橋 直武 大正六年八月 日就職
 第二十代 大佐 福留 越太郎 大正十年六月二十八日就職
 第二十一代 大佐 土方 清 大正十一年八月十五日就職
 第二十二代 大佐 嶋 永太郎 大正十四年十二月二日就職
 第二十三代 大佐 金子 規 昭和二年三月五日就職
 第二十四代 大佐 一色 留次郎 昭和三年八月十日就職
 第二十五代 大佐 三宅 俊雄 昭和五年八月一日就職
 第二十六代 大佐 栗田 小三郎 昭和六年八月一日就職
 第二十七代 大佐 柳下 重治 昭和八年八月一日就職
 第二十八代 大佐 今村 勝次 昭和九年八月一日就職
 第二十九代 大佐 鈴木 貞一 昭和十一年八月一日就職
 第三十代 大佐 津田 美武 昭和十二年十二月一日就職
 第三十一代 大佐 外立 岩治 昭和十四年八月一日就職

三、戦死將校略歴

一、陸軍少佐 吉 松 秀 枝
 高知縣の人、明治十年の役第三大隊長として従軍同
 年二月二十三日横木附近の戦闘に於て優勢なる賊徒
 と奮闘し遂に壯烈なる戦死を遂ぐ
 二、陸軍少尉 河原 林 雄 太

福岡縣の人、明治十年の役、隊旗手として従軍同年二月二十二日木の葉附近の戦場に於て勇戦遂に壯烈なる戦死を遂ぐ

三、陸軍少尉試補 井手利見

明治十年の役第二大隊第二中隊小隊長として二月二十三日木の葉附近の戦場に於て戦死

四、陸軍大尉 天野巖吉 (第二大隊第二中隊長)

陸軍中尉 助川正敬 (第一大隊第二中隊小隊長)

同 宗野頼行 (同)

同少尉試補 幸川甚蔵 (同)

陸軍少尉 藤崎繁樹 (第一大隊第一中隊小隊長)

明治十年の役熊本に向ひ前進中二月二十六日鍋田村(山鹿附近)に於て賊の大喧嘩の際戦死す

五、陸軍少尉 中村敬三 (第一大隊第二中隊小隊長)

陸軍少尉試補 松木光 (第一大隊第四中隊長)

明治十年の役熊本に向ひ前進中二月二十六日木の葉附近の戦場に於て戦死

六、陸軍大尉 津森秀實 (第一大隊第三中隊長)

陸軍中尉 柴野誠茂 (第一大隊第三中隊小隊長)

一二四

明治十年の役二月二十七日高瀬附近の戦場に於て奮戦最に突入し賊數十を殲し遂に壯烈なる戦死を遂ぐ

七、陸軍中尉 長江貞恒

同 少尉 今泉直門

同少尉試補 芦村英五郎

明治十年の役第二大隊第四中隊小隊長として三月十四日木の葉より七木に前進中賊と衝突し掃蕩より正午に至る間激戦我が軍勇戦す、賊窮迫して刀を揮つて我が軍に侵入し我が軍撲まず遂に之を敗る、此の戦場に於て長江中尉以下九名勇戦して殲れ、徳田中尉以下十三名負傷す

八、陸軍少尉 乾直作

同少尉試補 原田直敏

明治十年の役第二大隊第二中隊小隊長として三月十五日掃蕩より鉢割山(木の葉東方)附近の戦場を攻撃す、然るに該山の森林稠密にして賊壘を窺見するを得ず勇戦迫するに乾少尉先づ鎧れ、戸田中尉重傷を蒙り原田少尉試補奮迅亦鎧れ、屬する所の將校悉

0728

く死傷し下士も亦殆ど死傷し、芦原曹長中隊を指揮し日後に及んで賊壘を陥る。

九、陸軍中尉 印 牧 誠 篤

明治十年の役第二大隊第四中隊に在りて従軍、三月十七日二俣附近に於て敵と對峙中、賊壘を攻撃し其の二、三を陥れたるも爾後諸隊逐して進まず、賊の爲三面より挟撃せられ奮戦中賊の地雷火に罹り殲る

十、陸軍中尉 月 岡 三 郎

明治十年の役第三大隊第一中隊に在りて従軍、三月十七日木の葉附近の驛に於て中隊に告諭し奮戦賊壘を陥るべきを約し、勇猛賊壘に突入し其の數個を陥れ賊を陥すこと算なかりしも爾後賊壘より猛火を蒙り遂に壯烈なる戦死を遂ぐ

十一、陸軍中尉 大 塚 勝 作

陸軍少尉 有 井 雅 之 丞

明治十年の役第三大隊第一中隊に在りて従軍、三月二十日植木附近の賊を破り追撃中、向坂に於て優勢なる賊と衝突勇戦遂に殲る

十二、陸軍中尉 和 田 正 英

明治十年の役第三大隊第四中隊に在りて従軍、三月二十五日、植木西方地区に於て賊壘を抜き追撃中賊の反撃を受け奮戦遂に殲る

十三、陸軍大尉 北 植 利 盛

明治十年の役第二大隊第一中隊長として長崎の警備に任じ、三月二十五日同地撤去、三月二十七日七木に於て大隊に合し、翌二十八日木留附近の賊壘攻撃の際勇戦將に突貫に移らんとするに際し戦死す

十四、陸軍中尉 中 尾 浩 藏

明治十年の役第一大隊第二中隊小隊長として四月五日南田島山麓南方の賊壘を抜き、鳥栖野々畑に追撃中、賊軍の爲左右より挟撃せられて勇戦して殲る

十五、陸軍中尉 福 田 昌 博

同 少尉 吉 川 元 永

明治十年の役第一大隊第三中隊小隊長として熊本城に急行簡城中、四月八日突圍隊に屬し安巳橋に向ひ突出勝に乗じて追撃し砲弾千個、米七百俵其の他多數の分捕品を得たり、此の驛に於て第三中隊福田中尉以下二十八名死傷す

0729

十六、見習士官 金子純一

明治十年の役第三大隊第一中隊小隊長として四月八日邊田野山(植木附近)の激戦に於て戦死す

十七、陸軍大尉 志摩如海

明治十年の役第一大隊第一中隊長として四月二十日、砂取村附近の戦闘に於て戦死す

十八、陸軍少尉 安部非香木

明治十年の役第二大隊第一中隊小隊長として五月三十一日三重市(大分附近)の戦闘に於て勇戦賊軍の爲退路を遮断せられ従卒四名を残し、小隊長以下悉く壯烈なる戦死を遂ぐ

十九、陸軍少尉試補 今村庶

明治十年の役第一大隊第四中隊小隊長として八月六日大原越附近の戦闘に於て戦死す

二十、陸軍歩兵少佐 花岡正貞

福井縣の人、明治二十七年、八年戦役の際第一大隊長として出征、爾來長谷川混成旅團に屬し旅團要路攻撃に参加し、明治二十七年十一月二十一日東鶴冠山砲臺攻撃に奮り力戦奮闘遂に下腹部に貫通銃創を受

け翌二十二日死亡

二十一、陸軍歩兵少佐 窪田秀三

千葉縣の人、明治三十七、八年の戦役の際第二大隊長として出征、同年六月二十二日雙陽邊門の戦闘に於て我が陣地の鎮鎗たる右翼を固守し、叱咤奮闘遂に胸部に貫通銃創を受け戦死す、享年四十有七

二十二、陸軍歩兵少佐 平岡八郎

鹿兒島縣の人、明治三十七、八年戦役の際第一大隊長として木越混成旅團に屬し先頭第一に出征、爾來九連城、陽陽邊門、賽馬集等に轉戦し、三十七年七月二十日檜頭附近の戦闘に於て勇敢壯烈部下を指揮し遂に腹部に貫通銃創を受け戦死す、享年四十有一

二十三、陸軍歩兵大尉 於田平吉

大分縣の人、明治三十七、八年戦役の際旅團副官として出征、爾來九連城、陽陽邊門、遼陽に轉戦し遼陽の戦闘に於て弾丸雨霽の間を挺身使命を帯びて數回往復し遂に敵彈の爲に斃る、享年三十有三

二十四、陸軍歩兵大尉 加來一夫

熊本縣の人、明治三十七、八年戦役の際第七中隊長と

して出征、爾來九連城、發陽邊門、遼陽等に轉戦し三十七年九月五日遼通溝附近の戦鬪に於て頭部貫通銃創を受け入院の後遂に戦死す、享年三十

二十五、陸軍歩兵中尉 辻 敬 義

熊本縣の人、明治三十七、八年戦役の際第三中隊小隊長として出征、爾來九連城、賽馬集に轉戦し三十七年九月五日遼通溝附近の戦鬪に於て戦死す、享年二十有九

二十六、陸軍歩兵大尉 宮原 五之助

鹿兒島縣の人、明治三十七、八年戦役の際第二中隊小隊長として出征、爾來七八盤嶺、三家子、遼通溝等に轉戦し三十七年九月五日第十二中隊長を命ぜられ十月十日木溪湖附近の戦鬪に於て重傷を蒙り遂に戦死す、享年三十有九

二十七、陸軍歩兵大尉 村 田 梅 夫

熊本縣の人、明治三十七、八年戦役の際第十一中隊長として出征、爾來九連城、發陽邊門、遼陽に轉戦し三十七年十月十二日木溪湖附近の戦鬪に於て胸部に貫通銃創を受け遂に戦死す、享年三十有五

二十八、陸軍歩兵大尉 松尾 松次郎

福島縣の人、明治三十七、八年戦役の際第四中隊小隊長として出征、爾來九連城、發陽邊門、遼陽等に轉戦し三十七年十月十二日第二中隊小隊長として木溪湖附近の戦鬪に於て左胸部貫通銃創を受け戦死す、享年三十 有九

二十九、陸軍歩兵中尉 山 口 四 郎

福岡縣の人、明治三十七、八年戦役の際第八中隊小隊長として出征、爾來九連城、七八盤嶺、遼陽等に轉戦し三十七年十一月九日第六中隊小隊長として木溪湖附近の戦鬪に於て泰然自若中隊長を指揮し遂に胸部に貫通銃創を受け同十一日入院の後死没す、享年二十有七

三十、陸軍歩兵中尉 福田 長太郎

山口縣の人、明治三十七、八年戦役の際第十二中隊小隊長として出征、爾來九連城、七八盤嶺、遼陽等に轉戦し三十七年十月十一日木溪湖附近の戦鬪に於て遂に敵弾の爲瘡る、享年二十有七

三十一、陸軍歩兵中尉 松 岡 輝 朝

鹿兒島縣の人、明治三十七、八年戦役の際第十二中隊小隊長として出征、爾來九連城、發陽邊門、賽馬集、遼陽等に轉戦し三十七年十一月十一日木溪湖附近の戦

0731

關に於て砲彈の爲殞る、享年二十有六

三十二、陸軍歩兵中尉 神 保 良 夫

和歌山縣の人、明治三十七、八年戦役の際騎隊隊手として出征、爾來九連城、賽馬集、七、八鐘嶺等に轉戦し三十七年十月十一日第六中隊小隊長として木溪湖附近の戦闘に於て奮戦遂に敵砲彈の爲殞る、享年二十有五

三十三、陸軍歩兵少佐 堀 八 郎

石川縣の人、大正七年八月第一大隊長として西伯利亞に出征、浦鹽附近の警備に任じ後黒龍江支隊に大隊を擧げて参加し偉功あり、大正八年二月獨支隊を組成し武市、ボチカレオ間の地區討伐中二月十七日『アンドレツカ』に於て優勢なる敵と遭遇し率先陣頭に立ち奮戦中敵彈の爲に戦死す

三十四、陸軍歩兵少佐 野 斐 瑛

福岡縣の人、大正七年七月第五中隊長として西伯利亞に出征、八月二十四日『クラエフスキー』附近の戦闘に於て軍旗を護衛し奮進中爆彈右胸部に命中し壯烈なる戦死を遂ぐ

三十五、陸軍歩兵大尉 瓜 生 幸次郎

福岡縣の人、大正七年勅員下令と共に應召、第十二中

一一八

隊小隊長として出征、八月二十三日『クラエフスキー』附近の戦闘に於て將校斥候として偉功あり、同夜迂回隊となり敵退路を遮断するや奮戦大に努む、偶々敵彈咽喉部に命中し同二十九日遂に『ドボスコエ』に於て死亡す

三十六、陸軍歩兵中尉 深 江 虎 雄

鹿児島縣の人、大正七年八月第三中隊小隊長として西伯利亞に出征、浦鹽警備及黒龍江支隊の行動に参加し各地に轉戦す、八年三月六日討伐中『ラザレフカ』附近に於て狙撃せられ腹部に負傷し同九日死亡す

三十七、陸軍歩兵少尉 砂 本 鶴 太郎

福岡縣の人、大正七年八月勅員下令と共に應召、第十二中隊附として出征、八月二十三日『クラエフスキー』の戦闘に於て迂回隊に屬し敵の退路を遮断し奮戦中頭部に敵彈を受け壯烈なる戦死を遂ぐ

三十八、陸軍歩兵中尉 藤 田 熊 次郎

福岡縣の人、昭和七年二月第五中隊第一小隊長として上海に出征、三月一日廟巷附近の戦闘に於て敵陣に突入、勇戦奮闘中敵彈を受け壯烈なる最期を遂ぐ

0732

四、吾聯隊の環境

一、小倉城址

小倉城址は小倉市西北部紫川左岸に在り、明治八年吾聯隊の創設より昭和三年十二月現兵營に移轉
迄駐屯せし所にして、大正十四年五月編制改正迄第十二師團司令部亦此所に在りたり。現在野戰重砲
兵第二旅團司令部及小倉聯隊區司令部陸軍造兵廠其跡に位置す、城は一名勝山城と稱し文永の頃緒方
惟重なる者初めて此所に城を築く、其の後城主を換ふるこゝ數代應永年中大友氏の持城となり大友之
親之れに居り、大内毛利二氏と豊前の領有を争ひしこゝあり。爾來幾多の變遷を経て天正十五年毛利
勝信之に居る、慶長五年関ヶ原の役に勝信西軍に味方し、黒田孝高に敗れし以來黒田氏の持城とな
り、同年冬細川忠興豊前豊後の地を合せて之を領し、寛永九年細川氏肥後に移り、小笠原忠貞攝州明
石より移り來り、幕命に依り九州探題として長崎の外交を掌る、夫れより連綿慶應年間に至る。

二、乃木將軍居住の址

小倉市室町現市役所前に在り、乃木將軍年餘僅かに二十五歳にして少佐たり、明治八年歩兵第〇聯隊長心得こなり此の地に住す。今尚乃木將軍居住の址を記せる標柱あり往時を追憶せしむ。

一三〇

三、丙寅の亂(慶應二年七月)の古戰場

慶應二年七月二十七日長瀨兵は軍艦に乗し大里に上陸し、直に小倉城に入らんこし其方を以て赤坂(上富野北方海岸)及鳥越峠(上富野より大里新町に通ずる峠を云ふ)に向ひ、一部を以て大里より藤松(新町東南方約一吉米)を経て間道より大谷(上富野より東南に互る大谷地)に迂廻せしめ、當時該諸要地を守備せし肥後藩兵(幕府の命に依り出動し小倉藩と協同作戰をなす)と大に戦ひ互に勝敗あり。今尚は赤坂に當時戦死者の墓碑あり、實に是等の鮮血も亦今日帝國の隆盛をなせる王政復古の基にぞありける。

四、宮本武藏の碑

赤坂延命寺境内に在り。武藏の川所及生年は詳かならざるも正保二年五月十九日熊本千葉城の居宅に没し、後碑は嗣子伊織の建設せしものなり。有名なる佐々木某と決闘の地殿流島は北方の海上に

0734

青松尉として風致を加へしが、今は文明の流に崩壊せられ之れを望むを得ず。

五、足立山

兵營の東北方に屹立せり。始め竹和山と稱せしも和氣公の奇瑞ありてより足立山と改む。

六、吉見城址

湯川北側高地なり。吉見伊賀の守の居城の跡なりと云ふ、里人此の山を吉見陣と稱す。文治五年源親房(源正統記を以て有名なり)によりて築かれ一族之れを守りしに、延文二年よりは大友刑部大輔之れに居り、應永年中は小野田兵部少輔種尙之れに居りしも其の後は詳かならず。

七、霧ヶ岳烽火所

吉見陣の東北に在り。今尙烽火所の礎石及瓦の破片等存せり。長崎奉行曲淵甲斐守、九州沿岸に黒船の來りし時又は急を江戸に報せむ爲め文化六年之れを設く。

0735

八、柳御所の跡

大里驛南二町柳浦町にあり、壽永の昔安徳帝の行宮なりと傳ふ。

九、立石原

水町に在り。今の高坊ミ云へる地にて、忠魂堂南方森林附近なり。天文二十三年九月大友義鎮の太將戸次猛連兵二萬餘を率ゐて此の地に陣し、吉川小早川の兩氏門司城より兵を出し、大に此所に戦ひたり。

十、柵塚

水町に在り。高さ六尺の野石なり、鎌倉時代規矩郡に領主屋々代り柵に定規なく甚だ不便を感じたり、一里人ありて大に之れを愁ひて家を出て上書し、三年日門外にて合狀したるまゝ相果てたり。是時康永年中の事なりしも里人の意遂に公開に達し、一定の柵を造ることを計されたり。里人之を徳とし其の靈を慰めんため碑を立て祭祠せしものにして、時に天應三年三月十三日なり、今に至るも毎年同

一三三

日祭典を行ふ。

十一、帝 踏 岩

伴根村大字朽網に在り景行天皇御駐蹕の跡なり

十二、湯 川

孝謙天皇ノ御宇天平寶字年中、和氣清原宇佐八幡に神勅を乞ひ、道鏡の怒に觸れ足の筋を斷たれ、大隈に流されける時、航海中暴風に遭ひ、宇佐郡長洲に漂着せしに神教あり、規矩郡岐多山の麓に温泉あり是に浴せば立所に癒へん云、即ち大に喜び再び舟に乗じて規矩郡に來り、温泉を尋ねて浴し給ひければ、日ならず癒へたり云、其の湯竈は現湯川區の中央尾立山麓に在り、温泉の湧出は絶えたり云雖も、舊跡及池を存し今尚出水あり、一小泉なれども清水滾々として湧出して老松の影を映して、公の誠忠を追想せしむ。

十三、孝子吉兵衛の墓

0737

四谷村字吉兼に在り、吉兵衛は享保三年吉兼に生れ、資性温厚家兄を助けて業を勤み、常行一しして世人を感動せしめざるなし、其の父英彦山香春嶽に参拜の意あり、吉兵衛之れを背負ひて登山し、其の希望を達せしむ。元文元年其の母眼病を患ひ、醫藥効を奏せず、復た母を背負ひて英彦山に参拜し平癒を祈る、延享二年又中風症に罹り、歩行便ならざる母を背負ひて伊勢参宮を果せり。國主至孝を聞き、米十五俵を賜はり其の後亦屢々恩賞あり、天明元年病没す、年六十四、安政四年國主特に其の墓を展す。

一三四

十四、毛谷村六助

川川郡毛谷村の産なり（二つに櫛屋村六助云ふ）天性精力、人に秀れ、而かも母に仕へて至孝、板橋村高津城（現八幡市外高槻）六助屋敷に居住し、立花宗茂に仕へ努力ありしと、又別説に曰く、豊臣秀吉九州征伐の際、其の勇士なることを聞き、彼れを引見し其の軍に従はしめんせしが、彼歸く、予ミ房を角して勝つ者あらば其の者の臣ならん、此に於て秀吉、麾下の勇士を選抜して、宮ノ尾神社（現篠崎八幡）境内に於て角力せしめしに、彼れ三十餘名を倒し、遂に加藤清正の臣、木村又兼の爲めに敗れしに依り清正の家來となり、貴田（二つに喜田とも言ふ）孫兵衛と改名し、勇名を

縣かし朝鮮の役に於て、壯烈なる戦死を遂げたりと、又毛利元就の臣後藤藤正（京極内匠とも云ふ）同藩の土吉岡一味齊を暗殺し、小倉に來り高橋家に仕官せむとせしを、六助吉岡の妻並に娘に助太刀をなし、三郎丸に於て仇討をなさしめたり、而して藤正の墓は、三郎丸官舎入口に在る無名之碑にして、又兵器支廠構内に、仇討に用ひし太刀を洗ひし池現存せり。

十五、谷村計介

明治十五年「軍人總鑑碑」を靖國神社境内に建てられ、大正十三年二月十一日、一下級幹部の身として階級五位の光榮に浴し、忠勇義烈の表徴として人口に膾炙せる佐長谷村計介は、我が歩兵第聯隊第二大隊第二中隊（即ち今の第六中隊）出身なり、當時勝山城西側田町に日曜下宿をとり、勉學のため時計を購入し、外出時限前迄汝々として修學に勉められ、該時刻に成るや確實に歸隊されたりしと、今尙其の時計は我が聯隊の准士官、下士官集會所に保管せられ偉人の風格を感ぜしむるものあり。吾等は軍神乃木將軍を長として仰ぎ、又軍人の總鑑谷村計介を出せし聯隊に於て軍務に服するの光榮を有す、豈に奮勵努力、一意奉公の實を擧げ、以て先人の徳を汚さざることを努めべけんや。

十六、曹長 榎木哲造

曹長は、西南の役に軍曹として乃木聯隊長の麾下に在りて従軍し、各地に奮戦す、植木の役に於

て、聯隊旗手河原林少尉戦死し、聯隊旗を薩軍の爲めに奪はるゝに及び、乃木聯隊長は單身敵中に突進し、死所を求めんとするの風あり、樺木軍曹は極力之れを諫止せしが、聯隊長は軍曹他用の機を慮ひ將に自刃せんす、偶々軍曹歸來し此の状況を見、再び諫止し刀を奪はんすれども能はず、茲に於て軍曹は手にせし銃を以て、聯隊長の腕を打ち刀を落さしめ、辛うじて自殺を抑止することを得たり。軍曹は後曹長に進み、軍籍を去り、城野字小原(現城野電車停留所北方約二百米)に住せしが、先年病没し、其の墓は上城野墓地に在り、將軍が世道人心の蕪清に貢獻せられし處、樹めて大なるは言ふ迄もなきも、其の一半は樺木軍曹の當時に於ける機宜の處置も、亦與て力ありと言ふべし。

一三六

十七、奥保登

元帥奥保登は小倉藩士にして、我聯隊第三代の長たり、明治四年陸軍大尉心得に任ぜられし以來、明治七年在賀留従軍以來、明治十年西南役には、突圍隊長として勇名を轟かし、日清日露の役に従ひ、殊に日露の役には第二軍司令官として殊勳あり、後伯爵を授けらる。北前東宮武官長參謀總長等の要職に在り、至誠至忠蕪清古武士の風あり、昭和五年七月十九日、八十五歳の高齡を以て歿す。

0740

十八、小川 又 次

舊小倉藩士なり、明治五年二月陸軍少尉となり、明治七年征露の役に従ひ、十年西南の役には突圍隊として大將と共に偉勳を奏し、日清役には第一軍參謀長たり後男爵を授けらる。日露の役には第二軍に在り、南山の役に右翼師團長として殊名を轟かし、明治三十八年大將に任ぜられ、後子爵を授けらる。剛直果斷を以て聞ゆ。墓は愛宕山（小倉中學校南側）に在り。

0741

五、忠 勇 美 譚

一三八

創立の歳古き我聯隊の輝かしい戦歴を緬げば先輩勇士の赫々たる武勳は躍如として人に迫る。一旦
緩急の秋、敵身殉國の大義に燃ゆるの士は、家を忘れ妻子を捨てたり。大君の御爲にこそ竹を馬革に
裹まむこのみ、爽ふ一片秋々丈夫の志いづれ勝り劣りのあるべけんや。各戦役の度毎に隨し出され
たる畫患美談は、そのみを舉げてよく小冊子のつくす所ではない。こゝには僅かに日露シベリア
兩度の役の身近な例を二つ三つ輯録することにした。他は推して知るべし。

(一) 花の臺に歸る

第四中隊伍長 井口手 八重蔵 (福岡縣)

回顧すれば明治三十七年五月の十一日、歐密旅銳の兵が衆を待んで本溪湖方面に來襲した時は、流
石に彼等も連戦連敗の汚名を雪ぎ一舉に陸雄を決せん意氣込みだつたから此戦陣に参加した我聯隊こ
しては全戦役を通じて最も苦戦難關を餘儀なくされたのであつた。こは云へ、我れも亦かゝる秋にこ
そこかねて勝山城頭を鍛錬せし此魂此腕を試さん時は今ぞ、幾萬の敵押し寄せ來るも尺寸の地も動

0742

く勿れまばかり、それこそ一騎當千の勇を以て死守したのであつたが敵の兵力が我れに數倍するのを如何せん！ 累々として横はる屍の中で重傷のために呻吟する血塗れの戦友を見てもどうすることも出来ないのだ。彼等は鐵石の心其のまゝの硬い表情で、何も見ず何も聞かず、たと射撃を繼續してゐるやうにさへ見えた。

『大和魂を現はすのは今日だぞ。』

轟然たる音響もこもこに炸裂する砲弾の雨を浴びながら井口伍長が一心に叫ぶのが聞えた。

『……………人生僅か五十年朝露の如しだ。生者必滅！ 營の上で死ぬるも一生なら、國家のために死ぬるも一生だ。今こそ千載一遇の好機だ。これに上越す光榮はないぞ。撃て撃て！ 狙ひ定めて撃て露助を！ もうひみ踏んばりだ！』

酒々落々々叫ぶ聲は、部下分隊のみならず附近一帯のつはもの達に新なる勇氣を與へた。此の惨憺たる状況の下に於てこれ程の心の餘裕のある云ふのも彼の養ひ來つた宗教心の御蔭であつた。家には父母兄妹妻子を殘しながら陣中に於てつねに彼の口からは愛國の熱情と佛の道に關しての外は何も聞く事は出来なかつた。是れ迄も部下の内に偶々不平の聲でも放つものがあるを彼は容を正して勅諭を忘れたか云つて諷するのが常であつた。だから部下も愧ぢてそれからは決して再び不平などは

云はないやうになつた。閑暇があれば佛教を研究して其の守り據る所は、愛國の精誠ニ宗教の御法ニのみである。其の肉體が已に幾度か死線を越えた事に依りて、其の魂は安心立命の境地に悟入することを得たのであつた。

一四〇

然し彼等の超人的の活躍を以てしても、終日の悪戦苦闘は、永い間苦樂を併にした多くの戦友達を次ぎ次ぎに奪ひ去つて殆んど餘す所がなかつた。彼は、傷の友を顧みて云つた。

「戦友は皆斃れたぞ。さあ今度は俺達の番だ！ 國家のために潔く死なう。どれ別れの呑んだ！」
こわづかに残る水筒の水を傾け互ひに手を執り合つてせめてもの名残を惜んだのである。そして再び立て決死の奮闘を試みた。かくする裡に朝來激烈を極めた此日の戦闘も、夕陽西に暮れ共ニ銃聲頓に衰へて、我軍は漸く危機を脱せんとした。然るに何ぞ、此時になつて悲情の弾丸は、彼の頭部を貫いた。諸世の短冊を懐にして、惜々として彼は戦友の後を追ふたのである。歌に曰く

君のため務つくして更にまた 花の墓に歸るうれしさ

静まり行く銃の音を彼等は今は挽歌とも聞いたであらう。

夕陽はいつまでも西の空を茜色に染めてゐた。赫々、閃に盡せし往荒夫の、昇天の途を照す如くに……………

0744

(二) 戦友の情

第八中隊一等卒 西川 熊平
同 看護卒 植田 治八

遼陽附近大密の戦陣の際、第八中隊は巧みに敵の砲兵陣地前に迫つて其の掩護隊に突入したのであるが、敵は意外に優勢で、不意を衝かれて狼狽へながらも逆襲して来たので我勇士の働きを以てしても頗る苦戦の状態になつた。

最先きに敵陣に躍り込んだ西川一等卒、突いてゐては間に合はんと思つたか忽ち銃を持ちかへて銃床でもつて撲り初めた。思ひがけぬ強襲の武器に怯んだ敵兵二三名忽ちの裡に擲ち伏せられた。其の武者振の勇しいこゝろ、阿修羅王の荒れたるが如しはかゝる場合の形容だらう。

所へ逃げ遅れた敵の放つた一弾は西川の右眼を撃ち貫いた。剛氣の彼も急所の痛手にばつたり倒れた。こ見るより馳せつけた植田看護卒は直ぐに應急の手當を施した。

「西川立てるか。傷は浅いぞー」

「大丈夫だ。難有う。なあに之れしきで……………」

「後へ退れ。此儘では大變だ。獨りで行けるか」

植田に扶けられて彼が漸く立上つた。たんに側方から、ウラーウラーの喚聲と共に新敵の一隊が殺倒して来た。其の様子を左眼を見開いて見て、つた彼は何思つたか植田の手を撈つてつかつか前に進んで斃れた兵の銃を執りあげて直ぐに此の敵に向つて突撃した。そして中隊の兵も之れを撃退した後、怒々、縹帶所の方へ歩みを選んだのであるが、其の勇猛な事は、後三年の役の鎌倉五郎景政が眼に立つ矢を抜きもせず其の敵を追ふて斃したのにも比すべきである。

其後植田看護卒は同じく遼陽附近遼瀋の戦場に於て、傷つた戦友達の手当をしながら彼自身亦重傷を受けて入院する身になつたのである。

野戦病院に恩問に行つた中隊長は、彼の重傷を見て驚いた。然しさり氣なく何か云ひ度い事はなにかこ訊いた。

「中隊長殿、西川のこゝ御存じですか。西川は……」

苦痛を忍び喘ぐやうに彼は語つた。あの日の西川一等卒の勇猛な働き振りを……

「中隊長殿、西川の功績を……」

「よし分つた。西川の拔群の功績を認めろ。そして……」

中隊長が大きくうなづいたのを見て彼は満足の笑を浮かべながら、目で別れの挨拶をしながら静かに

0746

永遠の眠に就いた。

かくて彼の口からは、戦友のこゝ以外彼自身に就ては何も聞くこゝは出来なかつたのである。庶

(三) 斃れて止まん武夫の意氣

第九中隊軍曹 今村 敬 次 郎

突如唸りを生じて飛來した敵の砲弾は高地上に突つて立つて味方を激勵してゐた分隊長の銃を擡めた。用を爲さなくなつた銃を捨て、彼は傍に斃れた兵の刀を執て敵の突撃に備へた。所へ再び一弾、今度は彼の頭を擡つて帽子を飛ばした。彼は傷の手當をしようともせず帽子を拾ひ乍ら叫んだ

「畜生！ 悪戯も大抵にしろ。近寄つたら目に物を見せるぞ」

所は同じ本溪湖東方高地。第三大隊の正面には約五ヶ大隊の敵が來襲した時の事である。彼は云ふ迄もなく今村軍曹のこゝで、當人は陣地中央の高地に在りて敵弾に擣まされながら勇氣いささかも衰へず、部下を激勵してゐるのであつた。

執念深い敵弾、此度は彼の右の膝下を貫通した。氣丈な彼もぼつたりと倒れた。

「今村軍曹、後方へ退がれ」

0747

此の勇士をむざむざ失ふべからずと思ふ中隊長は叫んだ。直に起き上つた彼は苦痛を隠して答へた
『大丈夫であります中隊長殿。今村の命はもう谷まりました。斃るゝ迄はやりませう……』

『退がつて手當しろ。いゝから誰か手傳へ』

そこで附近の兵は血潮滴る傷口を押へて警告をかけてゐる彼を無理に後方へ退けて手當を施した。

『喉着が高いぞ。落ち着いて狙へ。そうだ今のはいゝぞ』

突然耳許で叫ぶものがあるのでひよいと振り返つて見るに、其處には今村軍曹が傷の手當が終るか終らないかに早やくも戦線に飛び出して怒鳴つてゐるのであつた。それを知つた一連の敵兵は勇氣百倍して怒濤の如く押し寄する敵の攻撃を物ともせず、何れも此處を眞摯の地と定めて死力をつくして奮闘したのである。

彼の猛勇沈着な態度は一軍の士氣を鼓舞して我が戦捷の途を開いたばかりでなく、千載の下橋夫を起たしむるものがある。

(四) 此の母此の子

第十一中隊長大尉 村 田 梅 夫

優勢な敵の包圍攻撃を受けて、其の突撃を撃退するこゝ前後十回云へば、露兵の執拗さもさることながら、其の短い我軍がよくもそれ程防戦し得たことである。だが之れが爲めに大尉は、部下小隊長の大部さ中隊全員の三分の二を失つてしまつたのである。

本溪湖附近の戦場に於ては我が戦線の至る所にかくの如き悲惨な状況を現出したであらうけれど、此附近は殊に甚しかつたのではあるまいか。だがそれに辭易する彼では無かつた。否彼ののみならず別難危険悲惨なる状況に遭遇する毎に勇猛心と報效の志は、愈々熾烈になるのが日本軍人の特質では無いだらうか。

彼は平然として立上つた。敵弾は益々此附近に集注せられた。隊長が危い！ 部下は振り返つて止めんとしたが彼の悠々迫らない態度を見てはそれ口へは出し得なかつた。隊長の決死の覚悟、それは出征の首途に已に期した所で部下までも共に心に於て變る所は無かつたけれど、此日此時の大尉の心は忽ちに電の如く部下に感ぜられた。

「一死以て君國に盡す秋だ。余は勇敢な諸君と共に潔く討死しよう……」

傍に居た従卒は、此言葉を聞くに等しく本能的に身を起して彼の前に立ち塞がらんとした。時已に遅く敵弾は遂に彼の胸を貫いた。……半狂亂の體で抱き上げた従卒の腕の中で大尉の顔は莞爾に

して死を見ること歸するが如し云ふ平素の氣持を現はして、永久の眠に就いてゐた。附近のつはもの達は、やゝしばし其の身が屍山血河の戦場に在るを忘れて敬虔な祈を捧げたのである。……

戦終つて彼の徳を慕ふ部下の手に依て木深湖の丘上に彼の墓標が立てられた。生き残れる部下達は其の前で懇ろなる回向ささにも更に其の遺志を繼いで奮闘せんことを誓つたのである。

さて其の後補充隊に大尉の遺骨が到着したので、吉村中尉が之れを捧じて郷里の老母の許へ届けることになつた。所が行つて見るに、門に待ち受けた大尉の老母は、内へ入ることを拒んだ。そして唇を慄はせながら云つた。

「軍律は悪い事を懲らす筈なのに、なぜこんな不孝者の骨を殊更御持参になります。決して内へ入れんことじゃございませぬ」

突然の申出に呆氣にさられ乍ら中尉は云つた。

「仰せの趣が私には一向解せませんが、まあ私はお上の命令で参つたものですから……兎に角御邪魔ながら大尉殿の御戦死の模様も申上げ又お宅のお話もお伺ひませう」

「云ふ譯で彼は座に通つた。不承無承に案内をする老母の様子を怪み乍ら彼は悉しく大尉の壯烈な戦死の状を述べた。いかつい顔で聞いてゐる老母の面は次第に柔いだ。

『まあ左様でございましたか實は……』

云つて語り出したのは、作の舊友何某云ふ者がどんなつもりで云つたのか老母に、大尉が遼陽で友人に決闘をして死んだと告げたので昔實の老母は深く事の實を正すことなく、勿論正して若しそれが眞實なら一辱恥の上塗になることを慮れたのかも知れないが、そんな譯で怒つてゐたのが中尉の話を聞いて初めて作の舊友が偽りを云つた事を知つたのである。老母は泣いて掃屋を詫言ひた。そして敏しさを押へ切れぬ面持で彼の遺骨を佛壇に並べた。

『坊や聞いたか、お前のお父さんは矢張りお國のために立派に死んでくれた相だよ。坊やも嬉しいか。おゝそうか、そうか。おばあさまも嬉しいぞ。……』

大尉の遺兒四歳になる孫を抱いたまゝ、靈前で躍つて喜んだのである。あゝ此の母にして此子あるはけに偶然ではない。

(五) 絶命尙敵を監視す

第十二中隊隊長 西村 甚

葦(山口縣)

木溪湖附近の戦場は、隨處に悲壯な場面を現出した。此れも其の一つ。

時は三十七年の十月十一日、倭將な敵は次第に我右翼方面に迂回して来た。そして約一ヶ中隊の敵歩兵は、我が右翼高地目がけて攻撃を開始したのである。所で此高地にゐたのは、獨り西村分隊十三名の勇士のみであつた。彼等は銃口も裂けよまばかり劇烈な射撃の雨を降らしたけれど、敵は衆を借んで忽ちの裡に直ぐ前方の高地を占領してしまつた。而かも地形漸く有利になれば、敵の浴びせる射撃も愈々猛烈を加へ、一進一止攻撃の手を弛めず遂には高地脚に取りついたのである。其頃には甲斐れ乙傷き分隊の兵士残るは僅かに四名になつたのである。それに砲撃は缺乏して来る、而かも之れが補充の途はない……。事態斯うなれば残つた兵の中から退却するの止むなきを進言するものもあつた。

「此高地は我陣地の要點だ。若しも此地を敵に奪はれたら、我軍の爲めには非常な不利だ。假令分隊は全滅しても、此處は一步も退かれない。潔く討死しよう……」

きつぱり云ひ放つて西村分隊長は激怒を續けた。然し砲撃の缺乏はどうする事も出来ない。或者は石をつかんで投下した。斯くなる上は、平素銀へし劍術の腕を試す秋だに己に死を決した西村は音響を引寄せて、部下兵卒の功績調書を取り出して傍の兵に手渡した。そして帽子を脱ぎ、手拭で鉢巻を締め、身を起して陣地の上に跪き部下を勵まし乍ら着剣して敵の登つて来るのを待つた。然るに天

も尚ほ未だ此勇士を殺すに忍びなかつたものか、田没になつても敵は遂に突撃して来る氣配も無かつた。そこで任務を完全に果し得た分隊長以下生き残つた勇士達は所屬中隊に復歸を命ぜられたのである。

これに引き續いて木溪湖の東南方高地を占領してゐた時、又もや優勢な敵は、我が背後に迫つて我軍は再び危機に直面したのである。これが爲めに此の際に隣接した右翼の敵兵は、一時其陣地を放棄せざるを得ない破目に陥つた。けれども彼は最右翼に在りて最も頑強な抵抗を繼續して敢て一步も後退するこゝを肯なかつた。

後に再び陣地を恢復した兵士達は、其處に悠然と散兵隊に立つて敵方を睨んでゐる彼の姿を望見して驚喜の叫をあげた。

「あー 見る四村軍曹殿だー」

「おー、分隊長殿！ 四村軍曹殿！」

彼等は口々に叫びながらかけ寄つた。然し終に彼の口からは何も聞くこゝは出来なかつた。敵弾は彼の頭部を貫通して早やこゝきれてゐるのであつた。群る將卒は彼の體を抱いて泣いた。一瞬直前の捷利の愉悅をも忘れたやうに……

一五〇
文治の昔、落魄の主を助けて奥州に落ちた武藏坊辨慶の衣川の奮戦を想ひ起す人々は、西村軍曹の此の壯烈な死に對照して、我が國武人の忠誠と勇猛と、古今其の軌を一にするのを欣ぶ共に、世界に誇る大和魂の消き熱血が脈々として永劫に承け繼がれゆくことを今更ながら心丈夫に思ふことだらう。

(六) 息絶ゆるも銃を手に

第三中隊伍長 宮原 繁 夫

「何度云つても同じ事だ。勤員と云ふものは一人は愚か、材料一本でも勝手に効かせば全般に狂ひが来るのだ……お前の気持は嬉しい。軍人としてはさもあるべきだ。だが……」

密庭を人が走る、材料が動く。昂奮した曹長の甲高い聲が聞える。勤員下令て目を廻してゐる中隊事務室の一隅で、中隊長が諄々と説き聞かせてゐる。其の言葉は勤々もすれば周囲の騒音に消され勝ちであつた。其前には一人の兵がちつと頭を垂れて目には涙さへ滲べて立つてゐる。

「宮原、お化しい中隊長殿を困らすな。直ぐにはすまぬ戦だから、缺員のあり次第戦地へ呼んで貰つてやるよ」

傍から特務曹長が取做し顔に云つた。

「分りました。度々相違みませせられた」

伯然として彼は其の辭を辭した。最先きに應召した彼は、補充要員である事を知つてどれ位落胆した事か。直ぐに中隊長の許へ飛んで行つて野戦隊の編入を願つた。けれどもそれは何人に對しても直ちに聞き容れらるべき事ではなかつた。今日て三度目の願ひであつた。中隊長の幹部も彼の熱誠は十分に認め乍らも否かゝる兵卒を率ゐる戦地に臨む事をどんなに希望したか知れないけれど、各部隊の要員を勝手に動かすことは出来なかつたのである。去り行く彼の後姿を見て中隊長の胸中には、彼を憐む心と彼の如き兵士のある事を欣ぶ心とが永く渦巻いてゐた。

若い血潮の澄つた彼、而かも小倉の街で育つた身が、どうして勇ましく出征する戦友を見送つて獨り残ることが出来よう……彼は恍惚の心を抱いて伯然と舎前の床几に腰かけてゐた。考へても考へてもそれは諦められない事であつた。夜露に打たれて更け行く夜を考へ込んでゐる彼を戦友は慰め乍ら慰慰に連れて行くのであつた。

ところが天も宮原の至誠を憐んでか、數日ならずして野戦隊に缺員が出来た。そして彼は最先きにその補充として編入せらるゝ事になつたのである。苦惱に引き歪められた彼の顔は、忽ちに五月晴れ

のやうに躍いて文字通り雀躍して喜んだのである。

従つて是一步シベリヤの地を踏んでから各所の戦陣に彼の働きの人一倍に壯烈であつた事は後述する迄もないだらう。

かくて武市附近が平穩に歸すると共に此處に冬營して思ひ出多き大正七年の歳を送る事になつた。

あくれば八年の二月十二日、佳節の酒の酔が未だ醒めぬ者もあつたらう夜半、所在に蜂起して良民を苦しめる過激派の殘黨を掃蕩する爲めに、聯大隊長の率ゐる一隊は、暗を衝いて肅々武市を出發したのであつた。宮原も選に預つて、隊伍の中に在て輕い足取りを續けてゐた。

滿日自衛隊の廣野原で銃火を交ゆること二回、逃ぐるを迫めて二月十七日の午前十一時、アンドレノカ西方に達した時、要所に陣地を占領せる敵の大集團に遭遇したのである。

吹雪に煙る彼方此方より待ち構へたる敵の猛烈なる射撃は、忽ちのうちに味方の大部を斃した。大隊長堀少佐亦太刀を揮つて指揮激戦のさなか、無念敵陣の中つて屍を異域の雪に埋めたのであつた。何れ劣りなき幾鷹の勇士、此處を先途と戦ふなかに彼宮原の武者振ひとしほ物凄く、十字の砲火を甘して憤激突進、而かも盾身敵に肉薄したのであつたが、彼も亦頭部に貫通銃創を受けばつたりと地に伏したま、遂に起たず……而かも手には固く銃を握つて、無念の形勢怨敵を睨んでゐた。忠魂永く

此の地に留つて、皇國を守護せんとの意氣ではないだらうか。遮、英、今や再び世界平和の春は訪れて、國運益々隆盛に、國軍の武威四海に輝いて、彼の衆も亦同じ戦に銳れし戦友と、もに、増國の宮居の奥に安らげく眠つてゐることだらう。

(七) 我が木領を

第四中隊上等兵

伊 佐

蒲

戸

神島縣

敵艦の葉に風薫る南國の夢に憧れを寄するの士は、九州の西南遙か海上に點々と浮ぶ常夏の團扇球を如何に見る。そこには紅色の繭に包まれた緑の孤島が平和な姿を現すのではないか。其の島陰に或は小川の畔に泡盛の甕を傾け、蛇皮線を弾く逸民の群を見出しはしないか。だが其の迷蒙は速かに啓かなくてはいけない。先づ此の島々より入營するつはもの達の風貌を見よ。

表には海のやうな神秘的な色を湛へて柔和には見ゆるけれど裡に包む烈々たる熱情は其の眼光に輝いてゐる。

島岸を哨む太平洋の怒濤は、彼等に海外雄飛の壯念を刺戟し、全島を震喚する雷例の暴風は、躍躍に動せぬ狼念を差はしめる。困苦缺乏に堪へ事に處して倦むことなき努力は、まことに他兵の模範と

0757

すべきものがある。だがそれも偶然の所産ではない。だからこゝに記す伊佐上等兵がかつて常に「沖
権兵の本領を示すは戦場だ」と言つてゐたのを聞いても敢て異とするには當らないと思ふ。

そして大正七年のシベリア出兵こそ正に千載一遇の、彼等の腕を試すべき絶好の機会とはなつたの
である。

八月十二日浦鹽上陸以後の伊佐上等兵の決死的奮闘はよく平素談話したことを裏書した。加之戦
友に盡す彼の限身的情誼は亦彼を知る者の涙なくして語り得ないほどのものがあつた。しかも其年は
武運日出度くブラゴエチエンスクに冬然することになつた。彼を始め勇士の面々が唸る鐵腕を揮して
骨肉を喫じたけれど好機はなかなか到来しなかつた。彼は生來始めての冷たい冬を感じた。そして降
り積む白雪を見た。

かくて翌年の二月十七日「アンドロフカ」附近に於て塙支隊の壯烈なる戦闘の幕は切つて落され
た。だが数倍の敵に對して此の支隊のつはもの達が如何に花々しい戦ひを續けたかは已に人のよく知
る所である。伊佐上等兵も此の支隊の一員であつた。「時こそ来れいざ」とばかり積雪を踏つて立つた
彼は、簡燈澤々と立草めて、彈丸雨散を飛び散る中を、神色自若宛も故郷の山河を馳騁するが如き
欣びと傾れた足取とて常に第一線の先頭に立つたのであつた。烈々たる報國の丹心の燃ゆるところ、

彼等の向ふところ雪も融けた、敵も靡いた。今や正に敵陣に踏み込んで最後の一刀を浴びせんとする
 刹那間氣な彼もぼつたり倒れた。敵弾は伊佐の胸を貫いて忽ち鮮血は雪を物凄く染つたのである。
 ウームと唸りながら氣丈な彼は立上つた。蒼白な面は乾と敵の方を睨んで進まんとしたが急所の痛
 手によるくと再び地に伏した。倒れては立ち又倒れ遂に彼れは意識を失つた。

戦終つて情ある戦友の手に依て翌日傷ける彼の體は武市の野戦病院に運ばれて手厚い看護を受け
 ることになつたが、越えて二十四日、人々の曉の夢未だ醒れぬ裡に彼の魂は靜かに天國に去つ
 た。

沖繩兵の本領は……お、力強い其の叫びは戦場に於て残りなく發現せられたのであつた。

(八) 梅花一輪又一輪

第六中隊上等兵 石川 貞一 (山口縣)
 同 同 高原 高房 (福岡縣)

春をも待たて散る梅花の如く、散ゆたる芳香を千歳の後までも音史に留むる數多の勇士に魁りて、
 彼等は八月二十三日、荒涼たるシベリアの一寒村ドウンスコエの北方に於て散つたのである。

0759

戦に先んじて派遣せられたる仲准尉の報るたる將校斥候六名の中に涼々たる彼等の風姿は殊に粗もしく見出された。

一五六

日本内地では、既に秋立つて單衣のうすら寒さをさへ感じさせる頃なのに、さすが大陸の氣候は、殊に此日炎帝威を逞しうして凄き難い苦熱は先づ重任を負ふ彼等を試練するのであつた。流れる汗を拭ふともせずひたむきに目的の地跡へと彼等は急いだ。途中で二名を岐路に出して落ち合ふ先きを定めた。そこで長以下五名の者は、雜草を分け溝を越え、匍匐潜行して行くこと約二千米……俄然、退却する佛軍に届して進入した敵の一隊と衝突した。距離僅かに百數十米……と忽ち敵軍は驟雨の如く斥候の身邊に落下した。一同素早く身を伏せたが高原は先づ傷いた。しかも據るべき地物は何も無い。麥を刈つたあとの小溝に身を忍ばせるのみであつた。高原は叫んだ。

「斥候長殿、早く歸つて報告して下さい、あとは高原が引き受けますから……」

其の言葉を聽いて斥候長も少しく後方に退つて報告を認めることにした。だが此時一弾は斥候長を傷つけた。此頃斜右後方の友軍の部隊から此敵に向つて射撃を開始した。そこで彼等は彼等の射撃の飛び交ふ中に取り残されたのである。

斥候長は重傷を忍び乍ら一枚の報告を認め終ると荒牧一等卒に渡した。そして彼等は已に立てない

0760

身を値りつ、重傷を抜き放つて來襲する敵の手にか、らんよりはと自ら柄を握つて其時を待つてゐた。石川は仲准尉の従卒であつた。直ぐにも敬愛する上官の安否が確めたかつた。傷の手當もし扶けて後方に退けたいと思つた。けれども此の敵を前にして而かも彼我の矢玉の雨を冒して動くことは到底望めないことであつた。そうだ！こゝで踏み留つて退路を安全にしよう、斥候長殿の身邊は他の者が扶けてくれるだらう。此敵をして一指も崩れさすものぞとばかり彼は死を決して防戦に努めたのである。

日没に至るまでも敵は遂に進撃しなかつた。准尉は重傷に喘ぎながら上官への報告の一念で我が眼線まで辿りついた。と其のまゝ遂に意識を失つた。だがそこは佛軍の前哨線であつた。夜が明けても石川高原の兩名は遂に歸つて來なかつた。

戦場掃除隊は翌日彼等を發見した。其の身邊には藥莖が小山の如く積まれ而かも身には銃弾を浴びあまつさへ無残なる剣創さへも受けてゐた。

此の状を見た益荒夫達は戦友を吊ふ悲痛の情を隠すことは出来なかつた。と同時に彼等の肩宇には凄壯な敵愾の氣が溢れた。彼等は互ひに戦友の死を必ず意義あらしめんことを固く心に誓つたのであつた。

0761

(九) 野菊の花と紅の花

一五八

第十中隊上等兵 高橋 廣 吉
同 久門 徳 葛 同縣

ハバロフスクのある夜、ベーチカの傍で加給品の酒で愉快になつたものは、頬を輝かせながら雑談に時を過してゐた。其の彼等の耳に、冷い戸外の空気を震はせて、哀調を帯びた唄の旋律が傳つて來た。ふつと話を止めて彼等は顔を見合した。

ハバロフスクのある夜、ベーチカの傍で加給品の酒で愉快になつたものは、頬を輝かせながら雑談に時を過してゐた。其の彼等の耳に、冷い戸外の空気を震はせて、哀調を帯びた唄の旋律が傳つて來た。ふつと話を止めて彼等は顔を見合した。

散るが習ひの定ぞや……

熱した頭を夜風に冷しながら口誦むてゐるのであらう。唄は尚ほも紺いた。彼等は今はなき戦友の俤を見つめるやうに周囲を見廻した。最前から小聲で和してゐる久門の隙には滑い露の玉が光つてゐた……何が彼等をそんなに感傷的にしたか。話は彼等がシベリアの野に到着して間もなく、クラエフスキーの戦場に参加した前夜に遡らなければならぬ。

ドウフスコエの村に屯した第十中隊のつはものは、大隊長の與へしビールを傾けて心ばかりの生

0762

別死別の宴を張つたのである。それは八月二十三日の夜のこと、此日は恰も舊曆の七月十五夜であつた。悲情の月は、懺悔たる地上の争闘を他處に咬々として、涯しなき荒野を照してゐた。森沈として更け行く夜、かざす雲に影を宿す月光に見入る勇士の胸には、そぞろ家郷が偲ばれるのであつた。

「おい高橋、可愛い妻子との別れだ、女房の分と子供に分と数だけ乾せよ、どうだい」

戦友の一人は瓶を取上げた。そして無心に月を眺めてゐた高橋の肩を叩いた。

「一度死ぬる身が二度の別れが要るものか、ハハ……それよりもあの美しい月を見ろ……」

屈託のない朗かな彼の聲で動々もすれば感傷的になり勝ちな此場の空気が急に明くなつた。そして彼等は英氣勃勃として明日の奮闘を互ひに心の奥深く期したのである。

翌二十四日クラエンスキーの戦陣に於ては、果して高橋の奮闘は目覚しく、驍威を振ふ敵の裝甲列車に突撃して壯烈な戦死を遂げたのであつた。七歳を頭に三人の子供と妻と老母を残しながら、涙く君國のためにすべてを忘れた丈夫の魂は、まことに景仰に堪へぬものがあるではないか。

戦捷つて補助機架卒として死傷者の收容に服務してゐた久門は高橋の傍に聴せつけた。だが彼は何を見たのか、ちつと立つたま、高橋の姿を見守つてゐた。お、微笑を含んで聴れた彼の顔の前に、彼の魂が化したのではあるまいか、可憐な一もとの野菊が咲いてゐるのであつた。久門も郷里

には最愛の妻と二人の子供を持つてゐる。思はずほろりとした彼は何か心にうなづきながら高橋の聲をいつくしむやうにその野菊を手折つた。そして遺骨と共に埋葬を添へて遺族に送つたのである。それが今冬窓の夜、つはもの達の口誦むあの唄であつた。

「母矢とる身と野に咲く花は……」

戦友の幻を見つめるやうにして唄ふ久門の聲は聴くものに一入の哀感を誘つた。だが彼久門上等兵も亦散るを習ひの定めに洩れず翌大正八年の春末だ淺き三月四日、パローフカの戦場に降り積む雪を紅に染めて雄々しくも散つたのである。

(十) 此の父此の子

第十二中隊上等兵 松 本 武

福岡縣

彼の家は極めて貧困な上に老父は病弱であつた。それ故に八月四日召集令狀を手にした時、報國の血は湧き立つて、心は已にシベリアの地に馳せても、なんとなく後ろ髪を牽かる、の思はあつたであらう。それを恐れてか父親は

「武雄や、家の事を心配するではないぞ、夫練な操舞をして呉れるなよ。家も親も、みなないものと

思つて軍人の本分を盡すのだぞ。家名に傷をつけてはならぬ。病氣の俺のことなどは、遠いさ、かも心にかけるではないぞ。い、か」

と病に憐みながらも懇々と諭した

「決して、決してお言葉には背きません。何卒お父さんもお母さんも此の武雄は亡い者と思つて下さ

いと
と彼も亦勇しく答へて征途に上つたのであつた。そして彼のクラエンスキー附近の戦陣に於て勇戦奮闘して右大尉部に貫通銃創を受け八月二十九日、野戦病院に於て庭訓を全うした喜びを感じ乍ら靜かに息を引取つたのである。彼の奮闘は空しからず、中隊の士氣を鼓舞して遂に裝甲列車を捕獲し、中隊は感状を授與せられたのである。

中隊からは、彼の勇ましい奮闘振を記して、其の死が郷里に報ぜられた。然るに其の返書は、父親からではなく、母親の名で中隊に届いた。披けば中には次のやうに認めてあつた。

(前略) 亡夫三吉儀も去る八月七日、武雄の出征を贈ますため幾倍の自殺を遂げ相果て申候、武雄事其後幾何もなく亡父の後を追ひ名譽の戦死を致候事、父も定めし満足の限りに候べく今は地下に父子相逢ふて語る事存候云々。

0765

言々悲痛、而かも尙彼の母たる氣丈さが短い文句の間に躍動してゐるではないか。之を讀んだ中隊長以下、熱涙を呑んで父子の壯烈に泣いたのである。

一六二

(十一) 死に面して勅諭を奉誦す

第六中隊上等兵 市野 作 太郎 (福岡縣)

市野上等兵(當時一等兵)は温厚篤實平素より表裏無く軍務に勉勵し中隊の模範兵であつた。昭和七年二月上海事變に際し勇躍出征し、同月十三日紀家橋附近の戦場に於て勇戦奮闘中腹部に貫通銃創を受けバツクリと倒れたが、上等兵は迫り来る死に臨み従容として勅諭忠節の條を奉誦し尙聲も細く「萬歳々々」を連呼しつつ静かに冥目した。死に直面し息絶えぬの時に方つて尙も聖勅を奉誦せる上等兵の至誠は洵に皇國軍人の雄鑑にして聴く人をして感奮興起せしめずには措かない。

(十二) 我が身を忘れて上官の危急を救ふ

上等兵 寺 崎 光 治 (福岡縣)

敵弾雨飛の中に負傷せる小隊長を負ふて後方の安全地帯迄退つた寺崎上等兵の美談。

時は昭和七年二月十三日紀家橋附近の激戦。

奥原小隊は敵陣深く楔入し、長以下僅かに十四名となつて數倍の敵と對戦、小隊長も大腿部に負傷し日没迄苦闘を續けてゐた、寺崎上等兵もその十四名の中に在つて勇戦奮闘してゐたのであつた。

日没後、後退の命令を受けたので、小隊長は先づ死傷者の收容をなし自らも退らんとしたが、先刻受けし大腿部貫通銃創の爲歩行不能にして軍刀を杖にしたるも泥濘の爲地中に没入して用を爲さず、七轉八倒しつゝ後退中、暗の中から飛鳥の如く馳せ來り小隊長を助け起した兵があつた。

見れば寺崎上等兵である。

小隊長は「お前はまだ負傷してゐないのだから今の中に退れ」と單身後退すべきを命じたが、上等兵は「弾は中りません、敵が來ますから早く〜」と無理に小隊長を背負ふて、敵彈身邊を掠め而も闇き泥濘の中を中隊の位置へと退つたのであつた。

漸くして通り着いたが、死傷者は更に大隊本部の位置迄後退すべきを知り、上等兵は再び小隊長を負ふて後退し始めた。途中には干潮時のことと濁流愈々激しき河あり、而も早朝架橋した浮橋は水面下に沈み、激しい流水は橋板を洗つてゐたが、上等兵を思ふの念厚き上等兵は橋板を足にて探り

ら、濁流に足をとられんとするを踏みしめつつ辛うじて對岸に涉りつき數百米後方の大隊本部の位置迄後退した。

一六四

小隊長の收容を終つた上等兵は、中隊の位置に復歸すべく別れを告げて今來た暗夜の道を戦線へと去つて行つたが、惜しい哉爾後日ならずして壯烈なる戦死を遂げたのである。

命令一下身命を惜しまず敵陣に突入するは皇國軍人の容易に爲し得る事なるも、寺崎上等兵の如く只管上官を思ふの一念より、我が身の危険を忘れて小隊長の急を救つた所の行爲は常人の容易に爲し得ざる美舉にして、其の名は我が聯隊の輝かしき勳と共に永く後世迄語り傳へられるのであらう。

0768

六、編纂餘録

昭和六年帝國在籍軍人會本部に於て我が聯隊歴史發刊以來十年、我が聯隊の將兵は軍に在ると郷に退くとを問はず先輩の遺徳を繼承し軍旗の光を輝かしつつ愈々報國の誠を盡し來れり。

而して此の十年の間に於て聯隊の遺せし業績少からず、又歴史中増補訂正すべき條項多々生ぜしを以て昭和十四年秋當時の聯隊長外立大佐は之が増補に決し各代聯隊旗手及各大隊の適任者より成る委員を選定し資料の蒐集原稿の作製に努め翌十五年三月之を完了す。

又軍旗の歌は、第二十一代土方聯隊長時代に作歌せられたるものに對し今回將校團にて十、十一項を増補せり。

史料中上海事變以後の分は諸般の關係上之を整理して聯隊に保存し他日更に増補することゝす。

帝國在郷軍人會會歌

- 一、建國二千有餘年神聖比なき皇國の
- 二、朝日輝く旗風に迷妄の雲拂ひ去り
- 三、郷に入りては忠良の民を勵み事あらば
- 四、つみむる業は異なれど思ひは一ついつても
- 五、あゝいくそたび天皇の降したまへる勅語の
- 六、忠勇義烈の血を享けし日本男子の輝ける

世界に負へる大使命果すは誰の仕事ぞや
正義の利劍人類を救ひ匡すはいつの日ぞ
出で、皇國に捧ぐべきわれらが此身この命
皇國を護る赤誠は吾等が胸に燃ゆるなり
聖旨かしくみ束の間も心ゆるめず鍛へばや
磨たふさみいざやいざ雄々しく共に進まばや

昭和十五年六月十一日印刷
昭和十五年六月廿一日發行

不許
複製

發行所

定價金參拾五錢

(送料金六錢)

網纂
發行

東京市麹町區九段二丁目五番地
軍人會館出版部
右代表者 野村定五郎

印刷者

東京市麹町區九段二丁目五番地
横山才四郎

印刷所

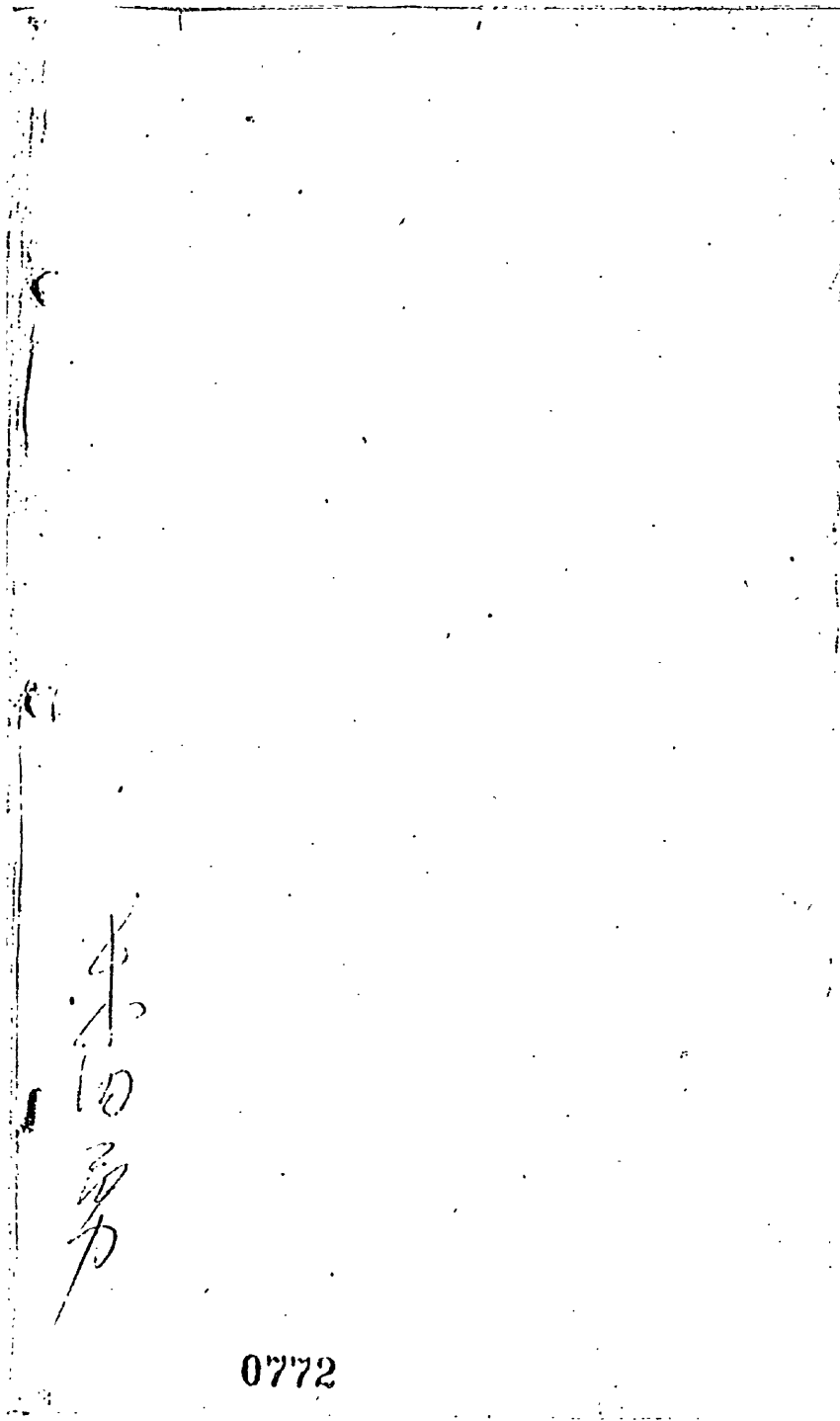
東京市麹町區九段二丁目五番地
財團法人軍人會館印刷所

東京市麹町區九段二丁目五番地

軍人會館出版課

振替東京二〇〇七番
電話九段(四)一一〇〇八番

0771,



Handwritten Japanese characters, possibly a signature or a vertical note.

0772